

1 出典：大澤真幸『サブカルの想像力は資本主義を超えるか』

問一 筆者が「フィクションと構想力」について論じる理由を説明する問題です。「だから構想力をふくらまそうということなのです。」とありますから、42～44行が解答の骨子となります。そこに肉付けしていきます。まず「現実の社会」がどのような状態なのか、直後の「イギリスのEU離脱問題」「トランプの大統領選勝利」の例で説明されていることをまとめます。この現実に対してフィクションができることは、12～14行目および42～43行目に書かれています。この部分から「フィクションを題材にしたほうがいい」理由をまとめます。

問二 トランプとクリントンの大統領選については文章中の複数の箇所で繰り返し述べられています。なかでも162～178行目に、ポリティカル・コレクトネス（以下PC）に賛同する者が優れていて反対する者は劣っているというクリントン側の暗黙の認識があると述べられており、これがトランプの支持者が多かった理由だと考えられます。従って正解はエです。アは「存在を無視された多文化主義的共存を容認できない多くの人たち」が誤り、イは「二〇一六年の大統領選は階級闘争であったのに」が誤り、ウは「労働力を搾取していたり雇用をうばったりしていることに疑問を持った多くの人」が誤りです。

問三 傍線部の直後に「もちろんもとをただせば、ドイツとフランスの間にある石炭産出地の帰属問題のようなことから始まっていた。」（56～58行目）とありますが、この文は「もちろん」で始まっており、「もちろんA。だがB。」などの譲歩の形が使われています。ですので、より重要なことはその後の逆接の接続詞で始まる「しかし、そうした細かいことを抜きに、この試みにある一番の理想を考えると、『移動の自由』が挙げられると思います。」（58～59行目）の部分にある、「移動の自由」がEUの理想であるという内容です。「移動の自由」については79～80行目に端的にまとめられていますので、この部分を使って説明します。そして、EUの目指していることを言い直している81～83行目を使って「移動の自由という理想を実験すること」をまとめます。

問四 「日本人の感覚で言うと」と傍線部で述べているように、日本人とヨーロッパの人たちとは考え方が違います。その違いを正しく説明している選択肢が正解です。87～89行目にあるように、難民を「本来は受け入れるべき」というのがEUの人々の考え方です。そしてそれは56～83行目で説明されている通り、「移動の自

由こそが人類の目指すべき理想の社会」だと考えているからです。日本人にはこの感覚がないので難民を受け入れないという選択に抵抗がないということになります。従って正解はイです。アは「日本は島国なので、陸続きのヨーロッパと違い移民が入ってくるのが少なく」が誤り、ウは「日本は伝統的に集団の調和を優先する心性があり」が誤り、エは「東の端にある日本にとっては移民の問題は重要ではない」が誤りです。

問五 空欄(5)は、166～172行目にあるように、PCは優れていてPCについていけない人は下層階級で劣っているという、多文化主義的な主張をする人が持つイメージに、優劣の関係があることを指摘する部分です。しかしこの優劣の関係は明白なものではなく、「暗黙のうち」のものであります。筆者はそれを、マルクス主義者が使っていた明白な優劣関係の間の争いを指す「階級闘争」という言葉を用いつつ、それが明白ではなくこれまでの「階級闘争」とは異なることを示すために「ずらされた階級闘争」と述べています。つまり、ここでは「ずらされた」と「暗黙の」は同じ意味ですので、空欄(5)には「階級闘争」が入ります。

問六 生徒Aさん、Bさんのどちらの文章にもPCへの言及があります。そこで本文でのPCの説明を確認すると、127～131行目にあるように、多文化主義的共生を許し差別をしない「結構な思想」と書かれています。が、一方で132～150行目には、多文化主義を掲げるアメリカの人や企業が、アジアでは労働力の搾取をしているという実態が書かれ、PCが「アンバランス」で「胡散臭い」と感じる人々がいることが述べられています。そのことを踏まえたうえで改めて生徒Aさん、Bさんのそれぞれの作文について考えていきます。生徒Aさんは、実写版映画『リトル・マーメイド』をめぐる話題のなかで、欧米の人々が黒人のアリエルを受け入れたにもかかわらず東アジアの国々が依然として黒人のアリエルに強く反対したことを問題にし、「欧米諸国の作品によって東アジアなどの国々に刷り込まれた古いイメージ」があることを指摘しています。まずは欧米の人々と東アジアの人々の反応の違いの原因を、本文の「アメリカの人や企業がアメリカ国内で多文化主義を掲げながらも中国では労働力を搾取している」という、いわば近い国の問題には関心を持つが遠い国には無頓着であるという内容と関連付けて考えます。欧米で黒人のアリエルが受け入れられたのは、欧米の人々にとって黒人差別の問題が身近なことだからであり、反対に東アジアの人々にとっては黒人差別問題が身近な問題ではないからと考えられます。いふならば左記の「アメリカの人や企業」がやっていることが反転して東アジアで行われているということです。次に生徒Bさんは、アメリカの人々が原爆のモチーフを軽々に扱っていることに対する日本人の強い反発を話題としたうえで、ナチスによる虐殺や九・一一テロに対してはアメリカ人が持っている

当事者意識が、原爆に対してはないことを指摘しています。これも、本文で書かれていたPCの実態である「アメリカの人や企業がアメリカ国内で多文化主義を掲げながらも中国では労働力を搾取している」ということと同じく、自分たちの民族に関係する問題には神経質になるのに、違う民族や国に関係する事には無神経になってしまうことが原因であると考えられます。したがって、本文と生徒Aさん、Bさんの作文は「身近な範囲の問題には配慮するが、遠く離れた国や民族の問題には配慮が及ばないというPCの現状」が共通して述べられていて関係があると考えられます。

問七 Aは添加の「そして」が入ります。Bは理由説明の「なぜなら」が入ります。Cは言い換えの「つまり」が入ります。Dは逆接の「しかし」が入ります。

問八 アは「養」、イは「損」、ウは「帰属」、エは「障害物」、オは「等価」です。

問九 内容一致問題です。正解はアです。イは「多くの人たちが声高に支持を表明していた側ではない方に、実は隠れた支持者が数多くいた」が誤り、ウは「選挙以前からクリントン側の考えに入らない人の存在が指摘されていた」が誤り、エは「その後で人間が好きなところで暮らせる自由が実現すると考えられている」が誤りです。

2 出典：佐藤厚志『荒地の家族』

問一 比喩的な表現の中で何を述べようとしているのかを考える問題です。祐治はすでに亡くなっている妻の晴美や、後妻の知加子の胎内で死んだ子どものことを思い浮かべたあと、自分自身も同じ運命にあることを「死ぬ順番を待つ大行列のひとり」として自覚するのです。誰もがいつの日か必ず死ぬということを述べたものでウが正しいこととなります。アは「早く死にたい」がおかしく、イも「生きていても仕方がない」という諦めが適合しません。エも「どのように死ぬべきなのかを考えている」が間違っています。

問二 「こんなこと」とは祐治の職業である造園の仕事のことです。傍線の直後の31行目に「造園が好きではなかった。苦ではないという程度だった。」とあります。それなのに仕事を続けるのは11行目にあるように「生きている間にどうにか飯を食って啓太を育てる」ためでした。つまり何があっても生きていくためには仕事は続けると覚悟したのです。

問三 季節の推移の描写が作品の中でどのような効果をもたらしているのかを問う

問題です。「春の陽気から一転、季節が巻き戻ったように空気が冷えた」のは、厳しい冬にたとえられる祐治の厳しい状況や精神状態を意味します。選択肢のイがこれを表現しています。アは「明るさの中にも厳しさが含まれている状況」が間違い、ウは「季節が巻き戻った」ことは「確実な季節の移り変わり」とは言えないので間違い。エは「そこに暮らす人々の心も同様に厳しく冷たいものである」というのが不適當です。

問四 明夫が重病にかかりながらも密漁を繰り返していることに対して気にしていた祐治ですが、いざ対面すると何も答えられないでいます。この場面では「お前に何がわかんだよ」と言われ、気まずい思いになっています。この時の祐治は100行目「明夫の味わった艱難辛苦」を思い、「捨て鉢になって一刻も早くこの世から逃れたい」と考えていることを察しているのです。しかし、その深刻な状況に対して祐治から明夫に対してなすすべがない状態にあるのです。

問五 110～112行目にあるように明夫は密漁の容疑で警察に突き出され、115行目にあるように持病が悪化し病院に搬送されます。祐治は明夫の父親の六郎とも懇意にしており見舞いに赴きます(71行目の発言など)。しかし、祐治は六郎に何も言えません。慰めるべき言葉が分からないのです。六郎が庭のハナミズキを見ているのは、六郎も言葉を失っていることを暗示します。その同じところへ視線を落とすという表現は祐治が六郎の気持ちに寄り添っていることを表わしていると解釈できます。

解答ではまず、明夫の現状についてまとめ、それを知った祐治が六郎を見舞い、同情(寄り添い・なぐさめ)の気持ちを伝えようとしますが、実際には何も言えなかったことをまとめます。

問六 慣用句の問題です。身体部位に対する語が使われているものです。なお、Ⅱ以降はひらがなでも構いません。Ⅰは「腹を決める」、Ⅱは「すね(脛)かじり」、Ⅲは「つめ(爪)に火をともし」、Ⅳは「した(舌)を巻く」となります。

問七 Aはものが正確に当てはまるさまで「ぴたりと」。Bは雲の垂れ込める様子で「どんよりと」。Cは乾燥していることに対する表現で「からからに」が入ります。

問八 アは祐治の生きる姿を表現したもの、イは祐治の現在の境遇について述べたもの、ウは明夫が密漁している事実です。エは明夫が祐治を憎んでいるということが本文にはありません。また六郎が祐治に対して冷たい態度をとっていることも読み取れません。

問九 この小説は 2011 年に発生した東日本大震災の被災地の抱える問題をテーマにしたものです。アは「客観的な事実をあげながら述べている」というのが間違いです。本文に書かれているのは祐治の身の回りの人間関係にとどまり、被災地の産業や経済全般に対する具体的な言及はありません。ウは「全く別の問題」が何であるのかが曖昧なうえ、「読者に告発する」といった直接のメッセージは読み取れません。エは「今後同様なことが起きた時にはどのようにふるまうべきなのかを教訓として残そうと」しているとまでは言えず、むしろ登場人物たちの生きざまを淡々と語っている内容です。正解のイは震災が人々にもたらした被害が「生き方」に及んでいることを述べている点で、祐治や明夫の生き方に触れたこの小説の内容にふさわしいものです。